

「オレ、靈感が強いんだよ」という男と付き合うと苦勞する!?

- 餌か敵かを判別する「原始系」の感覚と、仕分ける・探る「識別系」の感覚 -

ちょっとふざけたタイトルから始めてみました。

「靈感」は6番目の感覚とも言われていますよね。では、そもそも「五感」ってなんだったっけ?という理解からタイトルを読み解いていきます。

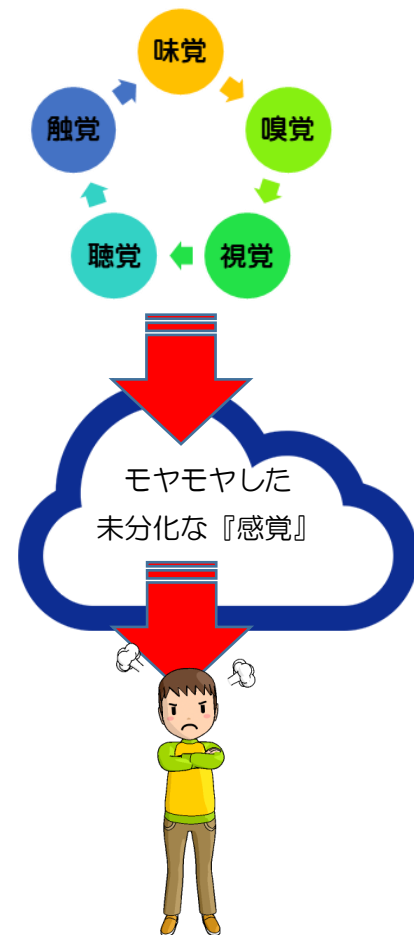
人は最初から5つの感覚を、必要な時に応じて使い分けられている訳ではなくて味覚・嗅覚・触覚・視覚・聴覚が混線してごちゃまぜで存在しています(感覚統合の号でも紹介していますが、交通整理ができていない状態)。右の煙みみたいなイメージです。この段階だと、本来視覚を使って外界を捉えたい場面でも「うるさい音」や「臭いニオイ」、「喉の渴き」、「風の感触・温度」等に注意が引っ張られてしまいます。

また、「感覚」は、『原始系感覚』(エサなどの取り込むべきものか、それとも天敵など身を守るために反撃しなければいけないモノかを判断する感覚で、人間が進化の過程でまだ視覚や聴覚を上手に使うことができていなかった頃のものと、『識別系感覚』(視覚や聴覚に頼らずに、触ることで「触り分け」をしたり、「意図的に感じ」たりするもの)に分かれます。こういった意味で、**感覚が未分化の子どもは「原始系」の感覚に寄りやすく、「○」か「×」かの2択で物事を処理しやすいです。**

また、特別支援学校には発達が緩やかなお子さんがたくさんいます。そして、そういう子どもたちは「感覚過敏(鈍麻)」があることが多いですよね(もちろんASD由来の感覚の問題を抱える子どもも多いですが…)。例えば、大きな音が苦手で、耳ふさぎがある子とか、人混みの中で突然「くさい!」と叫んでしまう子とか、ちょっと触られただけなのに全力で手を払いのけてしまう子とか、タグの付いている服を着ることができない子などなど。そういう子どもたちの感覚過敏の原因は、この感覚の発達の遅れ、つまり感覚の未発達、感覚の未分化さに拠ることがあります。また、そういった感覚の未発達さは、人との近い距離での接触や他人とその子自体の接触の機会自体を少なくしてしまうので、共感を土台とした発達を阻害してしまうことが多くなります。

また、未発達な感覚の中で「攻撃された!」と「原始系」が判断してしまうような刺激が入ると、過剰に身を守ろうとしてしまう「カウンターパンチ機能(感覚防衛反応という)」が起きてしまうので、他害や自傷に発展しやすくなってしまいます。つまり、感覚が「原始系」から「識別系」に伸びていかないと自分ではコントロールできない感情の爆発のしやすさを抱え続けることになってしまうことにもつながります。

タイトルに関して言うと、霊を感じるとかお化けが見えるという現象は、人間がまだ原人とか、類人猿とか言われていた頃に、例えば草むらに虎やライオン、ヘビが潜んでいるのを肌感覚として捕らえるために使っていた「原始系」が使われていた名残のものです(なんか嫌な予感がする!とかも!)。現代人の大人は、そういった「原始系」の感覚は、ほとんど退化し、物を探索する「探索系」(見る・聞く・触れ



る)が優位になっています。しかし、靈感が強い人という人やお化けが見えるという人は「触覚」が未発達なままに大人になってしまった結果、「原始系」残ってしまった可能性があるため、その人の共感性の発達が適切に成されているか(ちゃんとワタシに共感してくれるパートナーか?笑)を分析することが大切です。(子どもの頃の方がお化けが見えたり、シックスセンス的なものを感じるけれど、大人になるとそういうのが消えていくのは感覚の発達のおかげです。子どもの時の方が暗闇とか仏間とか怖かったですよね。)。たくさん恋をすることは、自分自身のコミュカを高めるので大いにオススメですが、感情の爆発のしやすさを抱えていない「探索系」の発達の結果共感力の高いパートナーを捕まえられるとステキです。

さて、最後に特別支援教育に話を戻して、この発達初期に現れる 感覚の未分化さが、実態として見られる場合には、感覚過敏の号で紹介するように視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の5つの感覚に加えて、意識しづらく、自覚しづらい前庭感覚(平衡感覚)と固有感覚(腱や関節、筋肉の感覚)を必要な時に、必要な感覚に集中できるようにトレーニングしていくことが必要となります。それができるようになると、目を使うべき時には視覚に集中したり、耳を使うべき時には聴覚に集中したり外界を「識別する」ことが上手になって、「食べ物か敵かに二分する」ような原始的な感覚が弱まっていきます。結果、不必要に感情が不安定になることが軽減されていきます。そういった手法が「感覚統合」といわれ、以下の様に定義されています。

「脳に入ってくるさまざまな感覚情報を目的に応じて整理し、秩序だったものに構成すること」

エアーズ(1920-1989)

また、感覚の発達はある程度決まった発達の道筋があり、健常発達をたどる子は、お母さんやお父さんの抱っこで前庭感覚を育て、おもちゃで遊んで関節の中に宿る固有感覚を育て、たくさん触れ合う中で触覚を満ちます。それが正常な三項関係(ワタシ-モノ-大人)の形成につながって、言語に伸びていく…という発達の構図になります。

触覚→視覚→聴覚(味覚・嗅覚は除く)→感覚の協応→姿勢の保持

この後は視・聴覚が育ちと同時に胸椎の伸展・ヘッドコントロールも上手になります。そういった学習のレディネスが形成され、以降は以下の様に言語性の発達を辿っていきます。

物と物マッチング → 物と音マッチング → 動作・口型・音声模倣 → 命名理解
→ 一文字一文字の逐語分解 → 属性理解(属性・グループ) → 感情理解
→ インターバル理解(用途を聞いて物を選ぶ) → 前置詞 → 副詞
→ 接続詞 → 文章理解・作成 …